
ポケモンヒストリー

名無し

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモンヒストリー

【Zコード】

Z6645Z

【作者名】

名無し

【あらすじ】

さまざまな地方を巡り歩いてきたサトシは、その実力を買われ、なんとカントー最強のトレーナー・ワタルへの挑戦権を得る！しかし、世界は広かつた……。もつと強くなりたいと闘志を燃やすサトシは、初心に戻るため再び各地方への旅を開始する！

熱いバトル、さまざまな陰謀、そして恋……。はたして、彼の旅に待ち受けるものとは！？

キャラ紹介

サトシ 17歳

「気合い」と「根性」でできた若きポケモントレーナー。相棒は「ピカチュウ」。そして夢もずっとポケモンマスター。そんな彼も成長し、トレーナーとしての実力は今やカントーでは1、2を争う程に。しかし、調子に乗りやすい所や無鉄砲さなどは変わらず、精神面の成長はあまり見られない…………と思いまして、可愛い女の子を前にするとたま～に赤面する」とも。でも周りと比べるとやはりまだまだ鈍感。

ハルカ 17歳

「ホウエンの舞姫」の一いつ名を持つ。コーディネーターとしての実力はもはやトップクラス。

当然外見も成長し、だんだん「可愛い」から「綺麗」になってきた。何とファンクラブまでできたとか。内面的にもすっかり大人………になった訳ではなく、同年代のヒカリや弟のマサトにまでいよいよにからかわれるなど、「大人の女性」までの道のりはまだまだ遠い（笑）。

最近はコンテストどころか、周りを完全シャットアウトして猛特訓しているらしい。

タケシ 21歳

ポケモンブリーダーにして、一ビシティジムリーダー。その幅広い知識でサトシ達をかげながら支える。皆のお兄さんの存在。しかし、

お姉をあああああん！！！」なのは今でも変わらない……。

カスミ 19歳

自称「世界の美少女水ポケモンマスター（長つ）」。水ポケモンをこよなく愛するハナダシティジムリーダー。軽そうなイメージとは裏腹にジムリーダーとしては誰もが一目置く存在。サトシだけでなく、ハルカやヒカリにもよく相談を受けるなど皆に頼られている。タケシがお兄さんなら、彼女は皆のお姉さん役と言つたところ（？）

マサト 14歳

ハルカの実弟。相変わらず生意氣だが、彼ももう立派なトレーナーに。尊敬する父の様なジムリーダーになるべく、今は修行のため各地方へ旅に出ている。

姉であるハルカのことは気にかけていない様に見せてても実はお姉ちゃん子だったり（多分）。

ヒカリ 17歳

今をときめく「シンオウの妖精」。その人気はもはやアイドル並。同じコーディネーターであるハルカのことは良き友人兼好敵手として今でも慕つてている。

超おしゃれ好きで人懐こく、今で言つて「守つてやりてえ」タイプ。でもカスミと一緒にサトシやハルカをからかうなど、以外と人を扱うのが上手いところも（良い意味でだよ？）。

同じくライバルであるノゾミと共にトップコーディネーターを目指し精進中。

キャラ紹介（後書き）

若干アニメと設定が違うかもしれません。ご了承を……。

旅立ちと始まり（前書き）

作者はサトハル、シユウハルがすきです。
苦手な方はご注意を。

旅立ちと始まり

夜……

とある地方のとある街の高いビル……

? ? ? 「…………」

その屋上から街を見下ろす人物が一人……
黒いローブを纏い、表情も頭からすっぽりかぶつたフードで見えない。

まさしく…………漆黒…………

夜空に浮かぶ月の光が無ければ、その姿は夜の闇に完全に紛れてしまうだろう。

? ? ? 「…………」

バタバタ

夜風がローブを撫でる

その漆黒の人物はただただ、摩天楼の上から眼下に広がる街を見下ろしていた

サトシ「じゃ、行つてきまー！」

ハナコ「またたく間にわね……。もう少しゆっくりしてこなが
いこない……」

サトシ「そんなじつとこへりんなことよー俺はもつと……もつと強く
なるんだー！」

ピカチュウ「ピカチュウッ……」

帽子の少年…………サトシの肩に乗るピカチュウが「同じく……」と
言わんばかりに鳴ぐ。

ハナコ「ホント、あんたはソレばっかりね……」

サトシ「何だよ母さん。もつと明るく見送ってくれよ……。愛しい
息子の決意の朝なんだぜ？」

サトシが少し冗談気味に言ひ。

マサラタウンの一般家庭のいくつ普通の光景。

ハナコ「ハイハイ。じゃあ、氣をつけていってらっしゃい。身体は
大事にね？」

サトシ「おう！ 行つてきます！」

遠ざかっていく息子の背中を見る…………もう何度もしきなったわね…
たことか

でももうあの子も一つ…………すいぶんたましくなったわね…

ハナコはその背中が点に見えるほど小さくなるまで見つめ、やがて
家に入つていった。

サトシ「うーん。ちょっと早すぎたかなあ……」

ピカチュウ「ピカ！」

ハナダシティの駅の西口。

サトシはある人物達と待ち合わせしていた。

田舎を見た 徒歩で会社へ時間は少し長いが仕事には早い
しつかし変わったなあハナダシティも……………
いわゆる高層化。もともとそんなに田舎町というわけではなかつた
が、10歳のころ自分が初めて訪れた時と比べれば、高層ビルやら
なにやらが多くなつていた。

サトシ「」の駅も昔は小ぢ…………あつーお~いカスミ~!~!~!~

向かってからオレンジ色の髪の少女が歩いてくる。

カスミー ちょっと！そんな大きな声出さないでよ！恥ずかしいじゃ
ない！」

サトシ「いやたゞで、こんな応じと」「わくらしゃなきや闘ふえないだろ?……いやあ、でも久しぶりだなあカスミー。ちょっとは女らしくなつたんじやね?」

力不足のため、おんがきもしには成長し難い。

サトシ「まあ、だつて元がアレじゃね……」トカソカソ、ジロー

カスミが近くの小石を拾おうとしたので、サトシは続きを言うのをやめた。

カスミ「つたく…………ん？あれタケシじゃない？」

サトシ「あ、ホントだ！お～いタケシイイ！！こつちだこつち～！」

！」

タケシ「おお一人とも！久しぶりだなあ！」

細田の男。タケシの登場だ。

サトシ「久しぶりだなタケシ！どうだ？彼女できたか？」

〔冗談気味に言つサトシ……………が

タケシ「サ、ササササササトシが……………彼女つて……………言つた……………！」

サトシ「何だよ、そんなびっくりすんなよ～！冗談だつて！」

タケシ「サトシからその部類の冗談が出るとはな……………。この六年あまりの月日は伊達じやないってことか……………」

カスミ「アタシもちよ～つとだけビックリしたわ。でも行動が突飛なところは変わりないわね……………」

タケシ「だな。いきなり「初心に戻りたいから最初のメンバーで旅しよう」だなんて……………。まつたく人のこと考えてるのかよ。」

サトシ「ハハハ。でも二人とも来てくれたじやん。やっぱ仲間だよなあ～俺たち！」

サトシは数日前、かのカントー最強のトレーナー、ドラゴン使いのワタルとバトルした。

何故そんな変則マッチが実現したかと言つと、カントーリーグ協会がサトシの有望性を買い、何とポケモンリーグ、四天王リーグともにすつ飛ばし、特別にワタルへの挑戦権を与えたのだった。

だが結果は……………完敗。

何とか三体を戦闘不能に追い込んだものの……、最後はワタルのカイリュー相手に手も足も出ず、ストレート負け。その圧倒的な力の差にサトシは睡然としたが、

ワタル「君の再挑戦を心から待っている。」

その言葉でサトシは吹っ切れた。

世界は広い…………俺はまだまだ強くなれる…………

というわけで初心に戻り、一番最初に旅をしたメンバーで旅をしようというのだ。

サトシ「まつー回るのはカントーだけだからさーそれまでの間つきあつてくれよ!」

ピカチュウ「ピッカチュウー!」

ピカチュウが「『めんねー』と言わんばかりに可愛らしく鳴く。

カスミ「しょうがないわね。可愛いピカチュウに免じて、つきあつてやるわ!」

タケシ「まあ俺たちにとつても、ためになるかもしれないしな。ブリーダー修行の旅、再開だ!」

サトシ「そうこなくちゃーよろしくなー一人ともーーー!」

バンバン!と二人の肩を叩くサトシ。

カスミ「つタ!~もうちょっと加減しなさいよー!…………で、カントー回つた後はどうすんの?」

サトシ「うーん、まだ決めてない。ホウエンにでも行つてみようかなあ~……」

カスミ「あら？ ジョウトすつ飛ばしてホウホンなんて……喜ぶわよ～？ 愛しのハルカア～。」

わらわの仕返しと並わんばかりにカスミが冗談気味に言つ。

サトシ「いひ、愛しひ…………ちげ――よ――別に余りに行くだけで旅に誘おうとしてた訳じゃ…………」

カスミ「ほあ～う、余りに行くつもりだつたんだあ～。」

サトシ「だ、だから違つ…………ちよつと世話になつたから顔出しひうと思つただけだつて……」

カスミ「そーやって必死になつてんのが怪しいのよ。つてか顔真つ赤よお～？」

サトシはもつじどりもどり。

でもこーいう冗談が通じる様になつたんだからすゞ成長よね。

サトシ「シッシッ――ああ～もひつ……わらわと行くぞー？」

ズカズカと進んで行くサトシ。

カスミ「ちょっと、行くつてどんに行くのよー！」

タケシ「逃げたか。」

カスミ「も～、面白かったのに……。」

タケシ「……そういうお前はどうなんだ？」

と今度は、タケシがカスミ同様、にやけながら言つ
……が

カスミ「フフフ。ヒ・ミ・ツー。」

タケシ「なつ……何い！？」

……

思いがけないカスミの返答に驚くタケシ。
じょ、冗談のつもりで言つたのに……

カスミ「ハーアイハイ、この話はここまで。せつ、サトシ追いかけま
しょ? このままじゃアイシ迷子になるから。」

そう言つてサトシを追いかけるカスミ。

タケシはそんな彼女の背を見る……

タケシ「…………」
「うりや、俺たちもうかうかしてられないな。サト
シよ。」

静かに呟くタケシであった。

カントー地方。どこの街のビルの地下

? ? ? 「………… 状況は?」

低い。地獄の底から響いてくるかの様な声。

部下? 「はつ! 先程、監視の者から入った連絡によりますと、ター

ゲットは今朝マサラタウンを出発。現在はハナダシティ駅にてトレーナーと思われる仲間二名と合流したとの事です！」

部下と思われる男が軍隊じみた口調で報告を上げる。

「??? 「仲間といふのは?」

部下1 「はつー！ ハナダシティジムリーダー・タケシ、ハナダシティジムリーダー・カスミと思われます！」

「??? 「なるほど。昔のメンツと言つわけか……。監視を続ける。動くのは奴らに隙ができた時だ。その際、他の者は適当に追っ払つておけ。目的はあくまでサトシ君のみだからな。」

部下1 「はつーでは引き続き監視の伝令を送りますー！」

「??? 「よし。お前はもう下がれ。次の報告を。」

するとひつ一人の部下が前へ出て、先程の部下と同様に軍隊口調で、
部下2 「はつー！ 解析は現在35%完了。このペースでこきますと1
0日後には完了する予定です。」

「??? 「思ったよりかかるつているな。急げ。」

部下2 「はつー！すぐに伝令を！」

バタン..... 部下達が扉を閉める音.....

もつ部屋にはボスと思われる男一人しかいない。

少し手間取ったものの、こちらは近い内にメダがつく
だらう.....

後は.....

「??? 「.....『ワダシ!!』.....か.....」

数日後……町外れの芝生……

タケシ「ブースター、戦闘不能！よつて勝者、サトシ！」

サトシ「いよっしゃああああ！！大勝利だぜええええ！！」

カスミ「つづつづつさこわね～……」

カントーを回り始めて数日。

サトシはカスミ、タケシと共に相変わらずバトルの日々を送っていた。

そして今日の草試合も見事勝利をおさめた。

トレーナー「ちえ。やつぱ強いなサトシちゃんは。」

試合相手の少年がブースターをボールに戻しながら言ひ。

サトシ「いやあ、俺なんてまだまださ。ワタルさんのカイリューに軽くあしらわれちゃったし。」

トレーナー「でもあのワタルさん相手にあそこまで戦えたんだ。十分強いよ。」

サトシ「そう~ま、まあ悪い気はしねえなあ~、ハハハ！」

カスミ「すぐ調子乗んだから……」

サトシとワタルの変則マッチの模様は全国にTV中継されていたので、多くの人がその戦いを見ていた。

同時にサトシの名も自動的に広まって、今ではちょっとした有名人

だ。

タケシ「そろそろポケモンセンターに行つた方が良いだろう。ポケモン達も疲れてる。」

サトシ「ああ、そうだな。」

タマムシシティに着いたサトシ達はまっすぐポケモンセンターへ直行、ポケモン達をあずけた。

タケシ「ジヨー……イさあああ……あでつ！ででで！？」
カスミ「アンタは変わつてないわよねほんつつとー。」

すぐにカスミに耳を引っ張られるタケシ……

タケシ「ちょつ……まだ名前呼んだだけつ……！」

懐かしいなあ……

などとサトシは呆れながらそれを見ていたが、

ジョーイ「マサラタウンのサトシさん。フタバタウンのヒカリさんから伝言を預かっています。ソノオタウンのポケモンセンターに連絡が欲しいそうです。」

サトシ「ヒカリが？はい。わかりました。」

カスミ「ヒカリ？前にシンオウと一緒に旅してたっていう子？」

またもやカスミがニヤニヤしながら囁く。

サトシ「またそれだよ……。ヒカリは友達一仲間だよー。」

カスミ「じゃあハルカは？」

サトシ「ハルカも同じだ！ーと、とにかく、ヒカリに電話しないと

.....

そう言ってトーヴ電話のもとへ向かうサトシ。

カスミ「ふう～ん……（ニヤリ）」

カスミは見逃さなかつた。

ハルカの事を聞かれた時と、ヒカリの事を聞かれた時の、サトシの微妙な反応の差を.....

旅立ちと始まり（後書き）

初めての投稿です！

どこまでやれるかわかりませんが頑張ります。

嵐の前の静けさ?

タマムシシティ・ポケモンセンター。

午後5時。

サトシ「よおヒカリ！久しぶりだなあ！」

ヒカリ「サトシ久しぶりー！元気してた？」

サトシはジョーイからの伝言を受け、TV電話でヒカリに電話していた。

ヒカリ「タケシも久しぶりね……あーもしかしてあなたがカスミさん！？わたしヒカリです！よろしくね！」

カスミ「よ、よろしく！」

ヒカリの勢いに珍しくカスミは押され気味だ。

ヒカリ「でもカスミさんって噂どおり美人ねえー！しかもジムリーだなんて！女として憧れちゃうー！」

その言葉にカスミはもひーイヤーヤ。

カスミ「そ、それほどでもおーーヒカリつていい子じやなあいサトシイー！」

サトシ「すぐ調子乗るのはびっちだよ……」

カスミ「何か言つた？」

サトシ「や、何もー。といひでヒカリ、俺に何か用か？」

サトシは今の空気が面倒くさいのでせつたと本題に入った。

ヒカリ「あーそうそう！最近ハルカと連絡取れないんだけど、サトシ何か知ってる？」

サトシ「え？ハルカ？いや、特に何も聞いてないけど……えつ、連絡つかないのか？」

ヒカリ「そうなのよ。私が連絡したのは三日前くらいなんだけど、それからいらぐら電話かけても出ないのよ。」

サトシ「ふうん……。カスミ何か聞いてるか？」

カスミ「いいえ、別に何も聞いてないけど……」

サトシ「タケシは？」

タケシ「いや、俺も別に……」

サトシ「…………まつ、あいつのことだ。ケータイの電源消しつぱとかなんじやねえの？それかどっかに落としてるとか。」

カスミ「サトシの中のハルカはよっぽどドジなイメージのね……」

ヒカリ「そつか……。わかつたわ。とりあえずまた連絡してみる。突然ごめんね。」

ハルカを心配してか、さつきまでの勢いがすっかり無くなってしまつたヒカリ。

さすがにサトシもすぐにフォローする。

サトシ「ま、まあそんな心配すんなって。後で俺がマサトあたりに電話して聞いてみるから。」

ヒカリ「ホント！？ありがとうサトシーわたし、よく考えてみたらハルカの身内の番号知らないから……。でも良かつたわー何かわかつたら教えてね！」

サトシ「ああ、すぐ連絡するよ。」

パア……と、突然明るくなるヒカリ。

ホント表情豊かだよなヒカリは……

お前は笑顔が一番…………って！何考えてんだ俺！？
ともあれとりあえず元気になつたヒカリを見て安心したサトシは、
しばらく雑談を楽しんだ。

ピッ…………TV電話の電源を切る。

ヒカリ「…ふう……」
ノゾミ「どうだつた？」
ヒカリ「うん……。サトシ達も何も聞いてないって……。」
ノゾミ「そう……。」

さつき電話では元気に話していたものの、ヒカリはやはりハルカが心配だった。話している間は気がまぎれていたのだろう。

ノゾミ「どうしたんだろうね？最近コンテストにも全然出でないみたいだし……。」

ヒカリ「うん……。」

ハルカが最近コンテストに出でていない事は、サトシには言わなかつた。

そこまでは…………何だか言いづらかったからだ。

…………わたし…………クリカツプ以来、ハルカに一度も勝つことないのに…………

でも…………ハルカがいなくなれば…………樂になる…………？

前に見たコーディネーターの雑誌にそんな事が書いてあつた。

「ホウエンの舞姫、戦線離脱！？シンオウの妖精、障害が無くなり一步リードか！？」

勝手なこと書かないでよ。……

だからこそ……越えたいのに……

ノゾミ「ハルカにクリカップのリベンジしたいんだけどな。……」

ヒカリ「うん。……」

……でも、大丈夫だよね。サトシもマサト君に聞いてくれるつて言つてたし。きっと何か事情があるんだよね。

ヒカリは無理やり気分を切り替えた。

ヒカリ「ハルカなら大丈夫！きつと何か事情があるのよ！」

ノゾミはいきなりヒカリの勢いが戻つたので多少びっくりしたが、すぐに不敵に笑い返した。

ノゾミ「そうだね。それにつまでも引きずつてたら、明日のコンテストにも影響が出る。」

ヒカリ「うん！明日こそ負けないからねノゾミー！」

ノゾミ「その息だよヒカリ。でもまさかアンタに励まされるなんてねえ。」

ヒカリ「ちょっとソレどういう意味よー？」

ソノオタウンのポケモンセンターに、一人の元気な声が響いた。

午後9時30分。

タマムシシティ・タマムシ美術館

美術館付近

？？？「目標に到達。指示を。」

ペペガガガツ…………通信機器の音…………

？？？「よし、では各管理コンピューターにハッキング。完了次第報告せよ。」

？？？「了解。では、ハッキングを開始します。」

ガチャガチャと色々な機器をリュックから取り出す。と同時に、も ののすごいスピードでそれらを操作し始める。

風もない静かな夜…………嵐の前の静けさとこつものだらうか…………

サトシ「修行？」

マサト「うん。3ヶ月くらい前だったかな？「自分とポケモンの力を高めるために修行するから、しばらく連絡取れなくなる」っていきなり電話きてた。まあサトシがよくやる山籠もりみたいなもんなのかな？」

サトシ「こしてもずいぶん長いな…………」

サトシはさつきヒカリに言つた通り、ハルカの事を聞くためマサトに連絡していた。

マサトは今はポケモントレーナーとして各地方をまわっており、今はジョウトにいるらしい。

マサト「それでしばらくなonthestに出れないって言つてたけど、まあそういう事だから。つちの姉が心配かけたねえ。」

相変わらず皮肉いつぱいマサトは言つ。

サトシ「ハハハ。まあ別にそんな心配はしてなかつたけどなー。」
マサト「あらら、お姉ちゃんかわいいわい……」

マサトは向こうにヤニヤニしてくる。

サトシ「まあ、まあ、心配したかなあー、ハハ……。じゃああらがとなマサトー・ジム戦がんばれよー！」

と言いつつ内心では結構心配してたサトシ。
これでひとまず安心だな。

マサト「うんー、サトシになんですぐ追いつくからねー。」
サトシ「つたく成長しても生意氣イー……。じやなつー。」

ピッ一携帯の電源を切る。

タケシ「何かわかったか？」

サトシ「ああ、何か修行だつて。」
カスミ「修行？」

サトシはせつときマトから聞いた事をタケシ達にも話した。

タケシ「コンテストにも出ないで特訓だなんて……随分な力の入れようだな…………。」

カスミ「しかも完全にまわりシャットアウトして3ヶ用も……。どつかの誰かさんに似て行動が突飛ね~。」

カスミがサトシを横目で見ながらわざといふべく叫ぶ。

サトシ「おこソレ俺に言つてんのか?」

カスミ「他に誰がいんのよ。」

カスミの即答にふてくされた様な顔をするサトシ
…………くつ。こつちょ前に張り切りやがつて
…………が

サトシ「つつおーーーしーー俺も負けてらんねええええーーちよ
つと外行つてくるーー」

カスミ「えつ！？外つて何、ドコー？」

サトシ「修行だよ修行！大丈夫すぐ帰つてくるからーじゃなつー！」

そう言つてサトシはポケモンセンターから飛び出して行つてしまつた……。

カスミ「ちょっと……ヒカリに連絡するんじや……もー行つ
ちゃつたし……。」

タケシ「ハハハ……。まあヒカリには俺達で連絡しておこい。」

カスミ「そうね。……にしてもホンッツツ似た者同士……

……。」

夜のタマムシシティに消えていった少年の背中にため息をつくカス

!!であった……。

午前1時

タマムシシティ……………ビルの屋上

? ? ? 「……………」

月も星も雲により身を潜めた夜の闇は、やはり漆黒のロープを纏つたその姿を完全に呑み込んでいた

眼下に見下ろすはタマムシ美術館。

そして……………

サトシ「ふう。けつこー遅くなつちまつたなあ。散歩がてらそろそろ帰るかピカチュウ」

ピカチュウ「ピッカツチュウー！」

肩に黄色いポケモンを乗せて歩く少年

? ? ? 「……………」

闇に紛れた「闇」は、ただただその少年を見つめていた

タマムシ美術館付近。

？？？「ハッキング及び突入準備完了。いつでもいけます。

？？？「…………よし、ここからもよく見える。」

先ほど出されていた電子機器の数々はすでに片付けられている。

？？？「では作戦及び目標の再確認を……」

？？？「リーダー。それは必要ありません。時間の無駄です。」

リーダーと呼ばれた男の言葉を遮り、同時に上司に対しては有り得ないであらう言葉を放つ

リーダー？「フツ……そつだつたな。お前は何よりも無駄を嫌うエージェント。そして…………」

？？？「どんな任務も無駄なく達成してみせます。」

またもやリーダーの言葉を遮る。

リーダー？「頼もしいな。では、『コードネーム』『ルカ』……」「……」

瞬間、雲が割れ、月光がさす。

リーダー？「…………突入せよ。」

ルカ「了解。」

ピッ……

リーダー？「ボス、『ルカ』が目標に突入しました。」

？？？「そうか。『ご苦労。お前はもう戻れ。』

リーダー？「はっ。」

どこかの街のどこかの地下……

現在は部下もおらず、部屋にいるのは「ボス」と呼ばれた彼一人だ。

……『ルカ』に任せておけば、まず間違いなくアレは手に入るだ

らひ……

残る鍵は……

? ? ? 「 『シド』。」

シド「はつ。」

? ? ? 「『水の罠』の搜索を開始しろ。」

シド「はつ。ただちに。」

ピッ 通信機器を切る。

ガサツ 机にあつた古い文献を手に取る。
そこに描かれてこるのは、

「龍」を思わせる体躯をした生物。

? ? ? 「 必ず 手に入れる 」

思わず声に出る。それほどまでに手中に収めたい存在。
「ンンン。ドアをノックする音 」

? ? ? 「入れ。」

ガチャ ドアが開く。

部下「失礼します。個体〇二に関する解析について報告いたします。」

男の表情が、期待のソレに変わる。

? ? ? 「 聞こづ。」

部下「..... 解析は100%完了了。いつでも適合実験に移行可能です。」

? ? ? 「 そつか。」

男の表情が、不敵な笑みに変わる。

? ? ? 「 ただちに開始しろ。」

部下「はつ！」

部下が立ち去るひつとする……………が

? ? ? 「 お前はどう思う。私がこの力を手に入れたとき、私はどのよつた存在になつてゐると思つ。」

突然の言葉に多少戸惑つた部下だつたが、すぐに表情を戻し答えた。

部下「……………」等しい存在に。」

男の表情が、凶悪な笑みに変わる。

バタン……………ドアが閉まる音。

今度こそ部下が出て行き、再び部屋には男一人となつた。
だが……………その笑みはいまだ浮かべたまま。
もつすぐ……………もうすぐだ……
主人の周りの空気が激変したのに気づき、傍らのペルシアンが顔を上げる。

どこかのマフィアのボスのような出で立つ。

その主人の左胸には「R」のバッジ。

そして、もはや狂氣とも言える表情で、言い放つ。

サカキ「……………私は……………」

風の前の静けさ？（後書き）

サトハル出でくるの結構後になるかも……
けど、必ず出しますんで！

遭遇！バカにされた？

サトシ「ふあ～……、流石に眠くなってきたな……。」

夜もふけてきたので、サトシはバトルの訓練を切り上げ、ついでに散歩をしながらポケモンセンターへ向かっていた。

サトシ「今何時……げつ、もう一時回つてんじやん。やつすぎた……。」

流石にこの時間だと肌寒い。散歩をやめ、サトシは身震いしながらポケモンセンターに急ぐ。

サトシ（せういやアイツ……一人で修行してるんだっけ。今頃何やつてんのかな……つて、もう流石に寝てるか。）

歩きながら空を見てみる。月も星も見えない。

（いきなり一人でジョウウトに行くつて言い出した時は、正直びっくりしたな……。）

あの頃は俺だつてまだ一人旅なんてしたことなかつたのに……しかもアイツ女の子だし。ちょっと焦つたつけなあ～……。

などと考えて歩いている内に大きなタマムシ美術館が見えてきた。

サトシ「美術館か。昔の俺ならあんま気にかけなかつただろうけど……、明日にでも寄つてみるかな？」

美術館の前を通りすぎる…………と思つたのだが、

サトシ「…………ん？」

ふと見ると、夜の美術館に入口から人が一人入っていくのが見えた。
こんな時間に…………てか、まだ開いてたのか美術館。
好奇心には勝てず、ついさつきまでポケモンセンターへ向かってい
たはずの彼の足は、自然と美術館に向かつていた。

サトシ「…………流石に夜中なだけあってちょっと不気味だな…………」

「…………」

ホールを見渡す。

シン…………と静まり返り、人っ子一人いない。

サトシ「夜の美術館つて結構定番のシチュエーションだよな。」

ちょっと肝試し気分で歩を進める。

カツー——ン…………カツー——ン…………

聞こえるのは自分の足音のみ。

よくわからない絵やら銅像やら、ポケモンの化石みたいのやらが沢山展示してある。

てかこれって不法侵入？いや、だつて入口開いてたし…………誰

にも見つかってないし…………大丈夫だよな？

全然ダイジョバナイのだが、残念ながら彼の常識の中では大丈夫らしい。

しかし、そんなサトシはふと疑問に思った。

サトシ「…………誰にも…………見つかってない？」

いや…………見つける側の人がいない？

ここまで割と色んな場所に行つたが、それまでの間人という人を見

ていな。

サトシ「警備員とかいないのか…………？いや、そんなことないよな

…………」

そういうや入り口にも見張りとかいなかつたな…………見たとい
つたらセツキ入口から入つていつた人…………

サトシ「…………！」

そこ今まで考えてやつと想い至つた。

まさか…………！？

そう思つた瞬間、彼の視界に人影らしきものが入つた。ただし……

サトシ「なつ…………だ、大丈夫ですか！？」

部屋の隅に、警備員らしき人物が倒れていた。

呼んでもゆすつても反応がない。気絶しているようだ。

サトシ「くつ…………！とつあえず救急車と警察を

…………」

今が異常事態であることに気づいたサトシは自分の携帯に手を伸ば
す…………が

サトシ「…………何で！？何でつながらないんだよ！？」

焦りとイラつきで思わず叫ぶ。何故か携帯がつながらない。
ちくしょ！…………だから誰もいなかつたのかよ！？

恐らういなかつたのではなく、見なかつた。ここにいる警備員と同じく、皆氣絶させられ、どこかへおいやられているのだ。

この分だと、監視カメラなどの警備システムも全く機能していないだろ？……

サトシ「人を呼びに行くか…………！？」でも、その間に逃げられちまうかも…………」

焦りだけがつのる…………が、

ふと、奥の曲がり角から人影が出てきたのが見えた。

サトシ「あ…………待てっ…………」

ほぼ反射的に体が動いた。向こうの人の影もサトシに気づいたらしく、走り出した。

間違いない…………泥棒だ！

ダダダダダダダダ！……と、夜の美術館を走り回る。

身体能力には自信があつたサトシだが、向こうも相当らしい。かなり早く、隙をついて死角に回り込まれてしまつ。

サトシ「くつ…………こくなつたらー！ピカチュウ！アイツに10万……はマズいか。でんじはだ！！」

ピカチュウ「ピカ～チュウッ！～！」

ビシイ！……と、夜の美術館に雷電が进る…………が

? ? ? 「…………！」

ヒヨイツ

なんと犯人は、かなり速度があるはずの攻撃を、意図もたやすくか

わしてみせた。

サトシ「なつ……………？」

何だアイツ！？あんなの俺でも難しいってのー。と負けず嫌いの彼は思つてしまつ。普通はできないと思つんだけどなあ…………。

サトシ「っくしょーーー」つなつたら挟み撃ち作戦だー・ピカチュウ！- こうそくこぢりで前に回り込めーーー！」

ピカチュウ「ピッカアーーー！」

ビュンッ！ーと、凄まじいスピードで前へ突っ込むピカチュウ。

？？？「……………！」

ピカチュウがヤツを追い抜く！

そう思つた瞬間、

ドカアツ！ーと、ピカチュウが不意に何者かに吹き飛ばされる。

サトシ「ピカチュウーーー！」

何とかピカチュウをキャッチするサトシ。幸い大したダメージではないらしく、すぐに地面に飛び降りる。

サトシ「つてアイツはーーー？」

慌てて周りを見渡すも、すでに犯人の姿はなかつた。

サトシ「くそつ……………逃がしたかーーー？」

ルカ（何故人が中に…………！？）

美術館・資料展示室奥。

そこでは先程の犯人…………ルカが何か手元の機器を操っている。
まあいい。任務には大して支障はない…………

カタカタカタカ…………ピピッ！…………カチャツ…………
どうやら保管ケースのロックを解除したようだ。

ギィ…………ケースを開け、中の物を取る。

ルカ（…………こんな物が…………神に近づく鍵になるとはな…………）

ソレをポーチにしまい込み、部屋を出ようと振り返った瞬間、

サトシ「見つけたぞ……」

ルカ「…………」

息を切らしながら、先ほどの少年と黄色いポケモンが入口に立つて
いた。

サトシ「そのポーチを渡せ……」

ルカ「…………」

何も言わない犯人……………
ん？よく見たらコイツ……………女か？

後ろで一つに束ねてある深い茶色の髪。
身体のラインがくつきり解る、ピチッとした黒い特殊スーツ（？）
みたいなのに身を包んでいる。ほら……キャツ アイみたいなあの

等と考えていると……………

クルッと、ルカが後ろの窓の方へ向ぐー！

その瞬間！

ビシイーーーと、窓が凍りつく。

ルカ「……………！」

サトシ「つーーー！お前の魂胆なんて見え見えだぜ。窓から逃げようとしたら冷凍ビームで凍らせろって、前もって指示を出しといたのさー！」

そつ自信満々に叫ぶ少年の傍らにはオーラーが君臨している。

サトシ「ああ、もう逃げ場はないぞ泥棒！」

他に窓も無く、出口もひとつしかない。確かに逃げ場はなさそうだが、

ルカ「……………私が他に手をうつてないと思つか？」

サトシ「え？」

瞬間、

ピカチュウ「ピカピーーー！」

バシイツ！！

サトシ「うわっ！？」

間一髪、ピカチュウが後ろの気配に気づき、サトシに攻撃を加えられる前にアイアンテールで遮つた。

マニユーラ「…………！」

サトシ「マニユーラー！？」って、あつ…………？」「

だがその一瞬の隙をついて、ルカがサトシとピカチュウとオニゴーリの間を縫うようにすり抜けていった。

サトシ「しま…………！待てっ！…………！」

必死に追うも、既に犯人は入口の手前まで迫っていた。
なんて速さだ……

ルカが美術館の外へ出る。
が、

????「そこまでだ…………！」

突然、サトシの聞き慣れた声が響いた。入口の方を見てみる。

ルカ「な…………！？」

タケシ「サトシ！大丈夫か！？」
カスミ「つたく、なかなか帰つてこないと戻つたら…………やつぱ面
倒に巻き込まれてんじゃない！」

ジュンサー「それを返しなさい！あなたを現行犯で逮捕します！」

そこにはタケシ、カスミ、そしてジュンサーら数人が立ちふさがっていた。

ジュンサー「包囲！！」

ズカズカズカ！！

一瞬で数人の警官が犯人の周りを固めた。

ルカ「ぐ…………！？」

サトシ「な…………何で…………？」

一人だけ状況が掴めないサトシ。するとカスミがため息をはきながら説明を始めた。

カスミ「アンタがいつまでたっても帰つてこないから、心配になつてアタシ達が探しに行つたら、美術館で倒れてる人を見つけたのよ。んで、ただ事じやないと思つて通報したの。」

サトシ「で、でも携帯繫がらなかつたのに…………」

タケシ「確かに美術館の近くでは繫がらなかつたが、少し離れれば問題なく通じたんだよ。」

ジュンサー「恐らく何らかの方法を使って、美術館付近にのみ妨害電波を張つたんでしょうね。周りに怪しまれないように。おまけに美術館の警備システムも全てハッキングされぱ…………。サトシ君が引っ搔き回してくれなかつたらきっと取り逃がしてたわ。」

サトシはポカーンとする。

ま、まあとりあえず…………結果オーライってやつ？

ルカ「…………！」

ジュンサー「確保つ！！」

警官達が一斉にルカに飛びかかる！

その瞬間！

ゴオ！！！と、

辺りか一瞬で炎の渦に包まれる

ル力「！」

サテジ「ハハハハ…?」

卷之三

炎が沈み、サトシ達の視界が回復する。が、

九月九日風物詩

ジョンサー「ぐつ！逃げられ……！？」

יְהוָה יְהוָה יְהוָה

? ? ? -

黒いロープがはためく

サトシ「…………え…………！？」

後ろから射し込む満月の光が、そのシルエットをかるうづじて浮かび
上がらせる……

いつの間にか目の前の美術館の屋根の上には、漆黒の人物とポケモ

ンが立っていた.....

タケシ「敵の新手か.....！」にしても.....！」

タケシは謎の人物の傍らに立つポケモンに目をやる。

ポケモン「.....」

既にブリーダーとしてはトップクラスの実力を持つタケシ。
だからこそ、わかる。

あのポケモン.....かなり育てられている.....！
バックから射し込む月光のおかげでどのポケモンまでは見分けられなかつたが、発せられる雰囲気というか、気配といったものがそれを物語つていた。

ジュンサー「もしものために保険を掛けてたってわけね.....！こうなつたらあなただけでも公務執行妨害で逮捕します！－ウインディイ！－！」

ウインディイ「ガウ！－！」
サトシ「ピカチュウ！お前も行け！－！」
カスミ「行きなさい！マイステディ！」
タケシ「グレッグル！－！」

ウインディイ、ピカチュウ、スター三三、グレッグルが突撃する。

だが、

? ? ?『炎の渦。』

機械じみた、低い声が静かに響く。

その瞬間、

「オオ……と、またもや炎の龍巻がサトシ達を襲つ。

「サトシ」「うわっ……？」

ポケモン達も、その凄まじい熱風の前に成す術もなく立ち止まつてしまつ。

「オオオオ……燃え盛る炎。

その向こうにたたずむ漆黒の人物を、サトシは何とか視界に入れる。

「サトシ」「く……お前は……一体……？」

「何者だ！？」と言葉を続けよひとするサトシ……が、

「？？？」「？」

ギン……

「サトシ」「ウッ……！？」

「オオオ……

炎の熱氣でその姿が揺らいでいる……

顔は頭からかぶつたフードの闇で見えないのだが、何故か一瞬睨まれた気がした。

「？？？」「？」

瞬間、

フツ……と、

漆黒の人物とそのポケモンは……その場から消えた……

ジュンサー「あつ……し、しまつた!!」

カスミ「逃げられたわね……」

炎は既におさまっており、まるで何事も無かつたかの様に、辺りに再び夜の静寂が戻る。

ジュンサー「まだ近くにいるかもしない!すぐに防衛線を張つて!」

ジュンサーが部下の警官達に指示を送った。
警官達が慌ただしく動いている……

タケシ「何だつたんだアイツは……」

そんな中サトシ達はしばらく呆氣にとらわれていた……が、

サトシ「…………」

タケシ「…………?サトシ…………?」

サトシはしばらく美術館の屋根の上を睨んでいた。

「何だ…………?何かしらないけど…………」

サトシ「…………めっちゃくちゃ悔しい。」

タケシ「まあ、逃がしちゃったしな。」

サトシ「それもあるけど…………何か…………バカにされたって言つかる…………。」

カスミ「は?」

「何言つてんのハイジ?」といった風な顔でサトシを見るカスミ。

サトシ「……後一步の所まで追いつめたのに、後から来た訳わから
ないヤツに邪魔されて……、で、何もできないまま結局どっちにも
逃げられて……」

何より、あの時一瞬でも怯んでしまったのが悔しい。あの時の自分
はまだ元気、「蛇に睨まれた蛙」状態だった。

サトシ「……我ながらみつともないぜ。」

グ……と、サトシは拳を握りしめた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6645z/>

ポケモンヒストリー

2011年12月26日21時47分発行